

## 文書館収蔵資料からみる近世の出版文化

—企画展「本をめぐる文化—江戸時代の本屋と読者たち—」の成果と課題—

木暮 咲樹

### はじめに

埼玉県立文書館には 50 万点を超える古文書が保管されており、その中には数多くの典籍資料も含まれている<sup>(1)</sup>。これらの典籍資料は、展示の一部として紹介されることはよくあっても、典籍そのものを主題に据えた展示はこれまで多くはなかった。また、令和 7 年 (2025) は大河ドラマで葛屋重三郎が主人公として取り上げられ、江戸時代の文化史、中でも出版文化への関心も高まりつつあった。この機をとらえ、文書館に収蔵されている近世期の典籍資料を展示資料の主軸に据え、その豊富さを広く知っていただくとともに、埼玉地域における出版文化の一端を紹介する企画展示を構想した。

本稿では、このような背景のもとに開催した企画展「本をめぐる文化—江戸時代の本屋と読者たち—」について、展示概要と主要資料を紹介し、あわせて展示を通じて得られた成果と今後の課題について論じる。

### 1. 展示構成と内容

まず、今回の展示の概要と構成を示しておく。

#### 展示概要

会期: 令和 7 年 2 月 1 日 (土) ~ 4 月 27 日 (日)

展示資料: 展示資料一覧のとおり

資料点数: 延べ 43 点

続いて、各章の構成とその概要を述べる。

#### はじめに 本を読む人々

本展示への導入として、江戸時代の人々がどのように読書をしていたのかを視覚的にイメージできる章とした。江戸時代の本の挿絵

や錦絵には、当時の人々が本を読む姿を描いたものが多く存在する。文久 2 年 (1862) に江戸で麻疹が流行した際、多数制作された麻疹絵の一つである「麻疹養生伝」<sup>(2)</sup>には、女性が暖かい格好をして絵草紙のようなものを読んでいる場面が描かれている。これは麻疹の養生中の様子とみられ、病気療養の場面においても読書が一般的な行為として浸透していたことを示している。また、溪斎英泉や葛飾北斎の絵手本<sup>(3)</sup>にも、床に本を置いて読む女性や、文机に本を置いて読む学者の姿が描かれており、読書が日常生活の中に自然に溶け込んでいたことが伺える。これらの事例を通じて、江戸時代における本の身近さを来館者に気づいてもらうとともに、当時の読書風景と現代の読書との相違点などを想起してもらうことをねらいとした。

### 第1章 花開く江戸の出版文化

本章では、文書館に収蔵されている典籍資料を用いて、江戸時代の出版文化の展開を概説することを目的とした。中世以前の日本では、1 枚の板に文字や絵を彫って刷る木版印刷が大半を占め、その担い手も公的な権力や寺社が中心であった。近世前期には、いわゆる「古活字版」と呼ばれる活字による印刷の出版が盛んになるものの、寛永頃からは再び木版印刷が主流となり、書肆(本屋を指す。本展示では近世期の本の奥書に見られる表記に合わせ「書肆」で統一した)による商業出版が京都、大坂に続いて江戸でも活発に行われるようになった。文書館の収蔵資料では、中世以前の印刷に関する内容を扱うことが難しく、展示資料としては近世前期に隆盛した「古活字版」<sup>(4)</sup>の紹介から始める構成とした。また、

出版文化の中心が京都から大坂、そして江戸へと移行していく流れを踏まえ、次章以降で江戸および埼玉県域の出版文化を扱うことを見据え、京都・大坂の書肆による出版物は本章で紹介した。時代順に展示することが理想ではあったが、収蔵資料上の制約もあり、地域ごとに代表的な書肆の出版物を取り上げる形にとどめた。

さらに、江戸の書肆の数や薬屋との兼業、出版統制など江戸時代の出版文化に関する小規模なトピックもあわせてこの章で紹介し、多面的な視点から江戸時代の出版文化について理解していただけるよう工夫した。

## 第2章 江戸の本屋が手がけた作品

本章では、江戸時代中期から後期にかけて江戸で活動した書肆たちが出版した典籍資料を収蔵資料の中から取り上げ、江戸の書肆の区分である地本問屋、書物問屋<sup>(5)</sup>がどのような出版を担っていたのかを具体的な資料を通して理解できる内容とした。特に、当時名の知られた書肆や、大河ドラマにも登場した書肆を選び、来館者が「この書肆の出版した本を文書館でも見ることができるのだ」という実感を得られるよう工夫した。展示資料の選定にあたっては、文学作品として広く知られているもの、挿絵が入り視覚的に楽しめるもの、現代の来館者にも親しみやすい内容のものなどを意識的に取り上げた。文字量の多い典籍が並ぶことで素通りされてしまうことのないよう、展示としての見やすさや興味を引く要素にも配慮した。

## 第3章 近世埼玉県域の人々と本

前章までは出版を担う側から江戸時代の出版文化をみてきたが、その発展を支えたのは書肆だけではなく、多くの読者の存在であった。本章では、近世期の埼玉県域に暮らした人々がどのように本と関わっていたのかを示す資料を取り上げた。文書館が収蔵する村方文書の中には、多数の蔵書を所有していた家も存在する。そこで本章では、そうした家々

の蔵書目録や本を購入した際の金銭受取証を展示した。蔵書目録については、入手日や具体的な金額などが記されているものを選び、当時の人々にとって本がどのような位置づけにあったのか想起しやすいよう配慮した。さらに、近世期には本を読むだけではなく、私家版を刊行するなど出版に関わる人々も存在したため、出版の担い手としての側面を示す資料もあわせて紹介した。また、本の内容を読み、学問に生かすという点では、県内で知られる国学者が近世期の出版物を用いて研究を行っていたことを、書き込み等の痕跡から示した<sup>(6)</sup>。本が生活に身近な存在であったことを踏まえると、本と人との関わりという内容はやや広がりをもち、資料選定が難しい面もあった。しかし、限られた展示スペースの中で、できる限り多角的に当時の人々の読書や出版との関わりを示すことを心がけた。

## おわりに 近代埼玉県域の本屋

本展示の締めくくりとして、明治時代以降の埼玉県域における本屋の姿を紹介し、近世から現代へと続く本屋の活動の連続性を示すことを意図した。近代に入ると、政府による通達類の発布や、学制の発布に伴う教科書類の需要の増加により、出版物の需要は大きく高まった。本展示では、時代設定を近代とし、明治から大正期を対象としたが、この時期の埼玉県域の本屋の活動を直接示す文書を収蔵資料の中から見つけることはできなかった。そのため、典籍の奥付に記された出版元に埼玉県域の本屋名が確認できる資料を紹介する形をとった。展示では、文書館からも近い須原屋本店へとつながる浦和の須原屋をはじめ、県内各地の本屋が出版に関わった資料を取り上げた。また、明治期のベストセラーであり、文書館収蔵文書群の中にも複数の所蔵が確認される『学問のスゝメ』についても紹介し、近代における読書文化の広がりを示した。

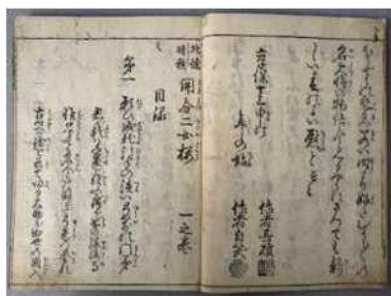
## 2. 主な展示資料について

本展示の第1章から第3章の中で代表的な

資料を取り上げて、その特徴や歴史的背景、展示意図などについて述べる。

## 第1章

「北条時頼開分二女桜」（小室家文書№2475）



北条時頼に対する源頼嗣と三浦泰村の謀反の計画を軸に、射撃の奥儀を伝える弓削刑部の家宝をめぐる騒動や、仇討ちの物語が展開する浮世草子である。本資料は京都の書肆八文字屋から刊行された、いわゆる八文字屋本にあたる。八文字屋本とは、京都の書肆八文字屋が出版した浮世草子や役者評判記を指し、代表的な作者として江島其磧や多田南嶺が知られている。二代目八左衛門の時に浮世草子出版の第一人者として名をはせるようになった。八文字屋は江戸時代前期から中期にかけて京都を代表する書肆の一人となった。本展示では、京都の書肆の具体例として八文字屋を取り上げた。八文字屋に関する研究としては、長谷川強氏が知られており<sup>(7)</sup>、長谷川氏の示した八文字屋本の分類によれば、本資料は八文字屋の全盛期に刊行された作品に位置づけられる<sup>(8)</sup>。なお、小室家文書の中には本資料以外にも八文字屋本が3点確認されている<sup>(9)</sup>。

「ある人のたづね 下」（奥貫家文書№3203）



江戸の書肆松会三四郎が出版した「壺の石文」13巻のうちの1冊で、女性が身につけるべき教養や心得を説く女訓書である。「源氏物語」などの引用も交えつつ、問答形式で教訓が示されている点に特色があり、挿絵は菱川師宣作と伝えられる。本資料を刊行した松会三四郎は江戸時代初期に江戸の書肆の中心として活動した人物で、仮名草子や往来物、儒学関係の書物を多く出版した。三四郎のように松会の名を冠する書肆が刊行した書物は総称して「松会版」と呼ばれ、松会の名をもつ書肆は他に市兵衛、吉右衛門、三左衛門などが知られている。第2章以降で江戸時代中後期に活動した書肆を中心に扱う構想があったため、その前段として、江戸で比較的早い時期に活動していた書肆による出版物を示す必要があった。松会は万治・寛文期に盛んに出版された「江戸版」<sup>(10)</sup>を手掛けた書肆を代表する一人でもあるが、文書館の収蔵資料には典型的な「江戸版」とみなせる資料が見当たらなかった。そこで、松会が出版し、江戸時代初期に流行した菱川師宣の挿絵をもつとされる本書を展示することで、江戸初期の出版文化の雰囲気来館者に感じ取ってもらえる構成とした。

「丙午明辨」（川島家文書№1291）



池田義信（浮世絵師・溪斎英泉）が著した子育て書であり、丙午の年に子を産むのは不吉とする内容をもつ。巻末には「留飲順胸散」<sup>りゅういんじゅんきょうさん</sup>という薬の広告があり、その取扱所として本書の出版者である丁子屋平兵衛の名が記されている。江戸時代には、書物の出版とあわせ

て薬の販売を兼業する書肆がよく見られた。本と薬という現代では結びつきにくい業種を同時に扱う書肆が多く存在したことは、江戸時代の書肆の業務が多様であったことを示す好例である。本展示では、この点を来館者に視覚的に理解してもらうため、薬の広告が明確に付されている資料を探し、本書を採用した。丁子屋平兵衛は江戸で比較的多くの薬の取次を行っていたことで知られる書肆であり、巻末広告にその名が見える点は、書肆の兼業実態を示す資料として非常にわかりやすい。また、薬の売弘所として併記されている大坂の河内屋茂兵衛は、大坂の書肆の中で中心的役割を果たした河内屋一統の一軒であり、丁子屋と同様に薬の取扱いが多かったことで知られる<sup>(11)</sup>。江戸と大坂の双方で、書肆が薬販売を兼ねる事例が見られることを示す点でも、本資料は展示の意図に適したものとなった。

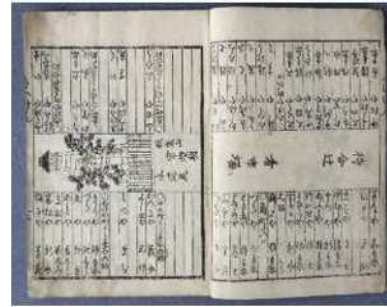
## 第 2 章

### 「小野篁歌字盡」(稲生家文書№1730)



江戸時代の手習いの教科書である往来物の一つで、共通の部首をもつ漢字や珍しい漢字の組み合わせの語を集め、遊び歌や挿絵を交えて紹介した本である。葛屋重三郎を紹介する上で、一般に広く知られる錦絵出版の功績だけでなく、往来物という手堅い出版物で経営基盤を築いた側面も示したいと考え、本書を取り上げた。大河ドラマの主人公にもなった初代葛屋重三郎の刊行した本は文書館にも複数所蔵されているが、その中でも「商売往来」や「女大学」など往来物の占める割合が高いことが特徴である<sup>(12)</sup>。

### 「吉原細見五葉松」(小室家文書№3392)



江戸の吉原遊郭の案内書の一つで、遊女屋や遊女の名、揚代(芸妓を呼んで遊興する代金)などをまとめた細見である。葛屋重三郎は細見の型体を縦長に改めて吉原の通りの様子を視覚的に示しやすくしたほか、丁数を減らす工夫や、序文に戯作者を起用する試みを行い、天明3年(1783)頃には「吉原細見」の独占販売を行うまでになった。なお、本資料は二代目葛屋重三郎の時代に刊行されたものである。大河ドラマの前半の主題としても扱われたことから、後述するアンケートでも「見られてよかった資料」として複数の来館者が言及し、メディア取材等でも注目を集めた。文書館には葛屋重三郎刊行の吉原細見が3点所蔵されている<sup>(13)</sup>。惜しい点としては、本資料が初代ではなく二代目の刊行であるため、初代が考案した革新的な工夫を直接示すにはやや不足があることである。ただし、初代の工夫は二代目にも受け継がれており、細見の形態や構成からはその影響を十分に読み取ることができる。展示では、来館者に誤解を与えないよう二代目の刊行であることを明記したうえで、吉原細見の出版における葛屋の役割を伝える資料として位置づけた。

### 「武鑑」(鬼久保家文書№2436)



武鑑は江戸時代に民間で出版された武家名鑑で、諸大名や旗本の姓名、居城、知行高など

を記載し、毎年改訂版が刊行された。出版を担ったのは、書物問屋の須原屋茂兵衛で、江戸時代中期以降は、ほぼ独占的に武鑑の出版を行うようになり、須原屋一門の総本家として知られた。文書館の所在地である浦和は須原屋とのゆかりが深く、当初から書物問屋の紹介では須原屋を中心に扱う構想をもっていた。収蔵資料にも須原屋一統の刊行物が多く確認できたため、その構想を具体化することができた。中でも須原屋の看板商品として知られていたのが武鑑であり、展示において必ず取り上げたい資料であった。文書館には須原屋茂兵衛版の武鑑が多数所蔵されており<sup>(14)</sup>、本資料もその一つである。

「金近着緒締善玉」（足立家文書№1030）



「善悪思案内」（足立家文書№1047）



遊里や吉原の様子を描いた錦絵で、人々の周りには「善」と「悪」と顔に記された人魂が飛び交っている。これは人の心の善悪を擬人化した「善玉」・「悪玉」の表現で、山東京伝の「心学早染草」<sup>(15)</sup>に由来するとされる。展示の中心テーマは典籍資料であったが、江戸時代の出版文化を扱う上で、錦絵は欠かすことのできない資料であり、必ず展示したいと考えていた。文書館にも錦絵資料は少数ながら収蔵されており、その中でもこれまであま

り注目されてこなかった資料を活用できないか検討した結果、本資料を選定した。「善玉」・「悪玉」は当時の黄表紙で大流行したモチーフであり、視覚的に親しみやすいだけでなく、出版物の選択や当時の人々の関心の動向とも結びつけて説明できる点が魅力であった。また、典籍資料は比較的小型のものが多かったため、錦絵の華やかさは展示空間の中で視覚的なアクセントとなり、アンケートでも好印象を示す回答が複数見られた。展示全体のリズムを整え、来館者の関心を再度引き付ける役割も果たしたと考えられる。

### 第3章

#### 「万書籍出入留」（野中家文書№1925）



中奈良村（現熊谷市）で旗本曲淵氏知行分の名主を務めた野中家における蔵書の出入りを記録した帳簿である。出版物だけでなく、写本や事件記録など多様な資料の貸出が行われていたことがわかる。野中家は多くの蔵書をもつ「蔵書の家」として知られ、収集のみならず、地域の名主等への貸出を通じて、地域の情報収集活動にも寄与していた。野中家の「蔵書の家」としての活動については、これまでも研究が蓄積されている<sup>(16)</sup>。展示では、資料の貸借という行為を単に文字で説明するだけでなく、実際にどのような本が貸し出されていたのかを視覚的に示すことで理解を深めてもらいたいと考えた。そのため、同じ文書群ではないものの、帳簿に記載されている書物の一つである「経典餘師」を隣に並べて展示した。「経典餘師」は江戸時代中期の経書の平易な解説書で、当時広く学習に用いられたとする研究もある<sup>(17)</sup>。野中家でも同書を所有し、貸出の需要があったことが帳簿から確認できる。本展示の準備段階では本資料1点を深く掘り下げるには至らなかったが、写本

類の貸借の実態など、さらに検討すべき点は多く、今後も継続して調査を進めていきたいと考えている。

「歌道用諸覚書 卷之一 (付蔵書目録)」  
(林家文書№2419)



赤尾村（現坂戸市）の林家に伝わる蔵書目録で、歌道に関する覚書の中に付されたものである。記載されている書物の多くが和歌関係の書で占められている。本資料の注目すべき点は、書名と冊数だけでなく、入手時期や値段が記されている書物が見られることである。展示では、領収書などから当時の本のおおよその値段を知ることができるものの、蔵書目録にそれらが記載されていることで、林家の蔵書がどのように形成されていったかをより鮮明にたどることができる。林家には十三代信海をはじめ、和歌や文化への造詣が深い人物がいたことが知られており<sup>(18)</sup>、本資料はその文化的活動の一端を明らかにする上でも重要な手がかりとなる。こちらも今後、継続して調査を進めていきたいと考えている。

### 3. 本展示の成果と課題

まずは、アンケート(末尾添付の様式)の結果から本展示が来館者にどのように受け止められたかを確認したい。来館者 1,100 人のうち、47 人から回答があり、回収率は高くなかったものの、自由記述欄には多くの感想が記されており、来館者の関心や受け止め方を把握する上で有益な資料となった。

来館のきっかけとして最も多かったのは、「ポスター・チラシを見て」であり、ほぼ同程度で「文書館ホームページを見て」が続いた。文書館の展示としては、ポスター・チラシをきっかけに来館した割合が比較的高かつ

た点が特徴である。チラシ等をどこで目にしたかを追跡することは難しいが、本展示ではチラシの配架先の拡大を試みたことにより、展示情報に触れる機会が増えた可能性がある。今後も展示テーマに応じて配架先を工夫することで、さらなる来館者の増加に繋げられるようにしたい。

来館数は「2～11回」の割合が最も多く(約47%)、初めて来館した人は全体の4分の1程度にとどまった。来館目的は「企画展観覧のため」が7割を超え、閲覧室利用は1割に満たなかった。この数字だけを見ると閲覧室の利用と展示観覧が結びつきにくいようにも見えるが、アンケートは来館の主目的を尋ねる形式であるため、展示観覧後に閲覧室へ立ち寄ったかどうかまでは把握できない。展示から閲覧室利用への導線を把握するためには、「展示を見て閲覧室に立ち寄りたと思ったか」などの質問項目を設けることで、展示がどの程度閲覧室利用のきっかけとなっているかを可視化できる可能性がある。

展示全体については、「大変よかった」が半数を超え、「よかった」を含めると9割5分以上に達し、高い評価を得ることができた。感想の中で最も多くみられたのは、大河ドラマに関連したテーマ設定への好意的な反応である。ドラマを通して江戸時代の文化史への興味が高まっている時期に、関連資料を切り口とした展示を構成したことで、展示観覧の心理的な敷居が下がったことがうかがえる。

「吉原細見」や「武鑑」、「森島中良」など具体的な書名や人名を挙げて関心を示す感想もみられた。そうした中で、埼玉県にゆかりのある内容、特に文書館の所在する浦和にある須原屋の歴史を知ることができた点を評価する声も多かった。自分が知っている場所に関係する資料を見ることで、歴史的な事象が身近に感じられたという感想から、地域史料を扱う展示の意義を再確認する結果となった。その他、印象深い感想としては、「実物を見ることができてよかった」というものがあった。ドラマに登場した「吉原細見」などの実物を

見られたことへの反応もあったが、特に「本などの図版でしか見たことのなかったものの現物を見て、サイズ感などがわかって興味深かった」という感想は現物の展示をする上で資料を通して伝えるべき大変重要な点に触れていただいたものである。江戸時代の典籍資料は比較的小型なものが多いため、「小さくて見づらい」という感想も一部に見られた。しかし、資料の大きさそのものを来館者に実感してもらえたことは確認できた。展示方法については今後の工夫も必要だが、大きさを伝えることができたという点においては一定の成果があったといえる。

最後に、このようなアンケート結果を踏まえて、本展示について担当者として総括したい。まず挙げられるのは、大河ドラマに関連したテーマ設定への反響の大きさである。アンケートの感想からもドラマに登場した作品と同じ、あるいは類似する資料を実際に展示で見ることができた点が来館者の強い関心を引いたことがうかがえる。当初の目的であった「文書館にもこのような資料がある」という文書館の資料の多様さを知っていただくという目的は概ね達成されていたのではないかと考える。展示をきっかけに来館した人がその後閲覧室を利用したかどうかの追跡調査はできていないものの、展示を通して文書館の資料に興味をもち、閲覧室の利用へと繋がる来館者が増えていくことを期待したい。

一方で、反省点としては、資料上の制約もあり、埼玉県域の書肆に関する内容の比重を十分に高められなかったことである。アンケートにも「もう少し埼玉県に関する内容があっても良かったのでは」という意見が寄せられた。文書館の展示は、基本的に収蔵資料を用いるため限界はあるものの、パネルでコラムのように他館収蔵資料の情報を補足するなど、工夫の余地はあったと考える。また、今回は文書館の典籍資料に着目した展示という構想から始まったため、文書館全体の近世期の典籍資料の分析や小室家(ときがわ町)、林家(坂戸市)、奥貫家(川越市)など蔵書を多く

持つ家を取り上げて紹介するコーナーを設けることができれば、より充実した内容になったのではないかと考える。これらは今後の自身の研究課題として取り組んでいきたい。

今回の展示が、より多くの方に文書館の典籍資料への関心を持っていただき、今後の研究や学習に活用していただくきっかけとなっていれば幸いである。

## 註

- (1) 文書館収蔵の古文書の中に含まれる典籍資料に関する研究として、長谷川宏氏の成果がある。(長谷川宏「当館収蔵文書に含まれる書籍の目録作業進行状況と課題」(『文書館紀要』第6号、1992年))。
- (2) 「麻疹養生伝(はしか絵)」(小室家文書№6369-3)
- (3) 「北斎画苑初編 全」(野中家文書№8249)、「溪斎浮世画譜」(野中家文書№8250)
- (4) 古活字版は安土桃山時代末期の文禄年間から、江戸時代初期の慶安年間頃にかけて出版された活字を使って印刷した本を指す。本展示で紹介した「孫子」(井上家文書№3407)は、徳川家康の命により臨済宗の僧である閑室元佑が木製活字で印刷した「伏見版」という書物の一つとみられる。
- (5) 地本問屋は地本(江戸で出版された本、主に娯楽用の絵入り本)を出版する本屋を指す。一方、書物問屋は儒書、医学書、経書などの「物之本」といわれる本を出版する本屋を指す。
- (6) 村田駿「国学者井上喜文の『紫式部日記傍註』書入れと「紫式部日記抜書」についての一考察」(『文書館紀要』第38号、2025年)参照。本展示第3章の企画にあたっては村田学芸員の協力を得た。
- (7) 長谷川強『浮世草子の研究 八文字屋本を中心とする』桜楓社、1969年、長谷川強『浮世草子考証年表一宝永以降』青裳堂、1984年、八文字屋本研究会編『八文字屋本全集』汲古書院、2000年、ほか。
- (8) 長谷川強『浮世草子の研究 八文字屋本を中心と

- する』桜楓社、1969 年、34 ページ参照。
- (9) 「那智御山手管瀧」(小室家文書№2473)、「善悪両面常盤染」(小室家文書№2476)、「花楓劔本地」(小室家文書№2477)
- (10) 江戸版は次のように定義される。「主に万治・寛文期に江戸で出版された独特の造本様式をもつ本のことで、具体的にいえば、漉き返しのなかでも殊に精製の粗な料紙、独特の字風、師宣風の挿絵を有すること、装飾的な題箋(角書き部分)と字風、元版である京版が 12・3 行であるのに対して江戸版は 15・6 行であること等の特徴をもつ版本のことである。江戸版は、松会市郎兵衛、山本九左衛門・本間屋・鱗形屋の四書肆が主に出版している。」(柏崎順子「江戸版考 其三」(『人文・自然研究』第 4 号、2006 年)、42 ページ引用)
- (11) 大和博幸「江戸期広域出版流通の一形態一本の取次と葉の取次の関わり一」(『國學院雑誌』第 120 巻第 2 号、2019 年)。
- (12) 「[女大学]」(足立家文書№524)、「商売往来」(藤城家文書№1170)ほか。
- (13) 「さいけん(吉原細見)」(会田家文書№8268)、「[吉原細見]」(井上家文書№3765)、「吉原細見五葉松」(小室家文書№3392)
- (14) 白石家文書には寛政 9 年、天保 6 年、天保 8 年、天保 9 年、天保 12 年、天保 13 年、天保 15 年、弘化 3 年、弘化 4 年、慶応 3 年の「袖玉武鑑」が存在する。新井(佐)家文書には、宝暦、天保、安政、嘉永の武鑑が存在する。その他にも例あり。
- (15) 人間の行為は全て内にある善魂と悪魂のなすわざであることを、商家の息子目前屋理太郎の身持ちの上に表す。悪魂の仕業によって放蕩したことから勘当され、盗賊にまで落ちぶれたが、善魂の勢力挽回によって教化されるというあらすじ。(『改訂新版 世界大百科事典』平凡社、2014 年 参照)
- (16) 小林文雄「近世後期における「蔵書の家」の社会的機能について」(『歴史』第 76 輯、東北史学会、1991 年)、高橋貞喜「幕末期農村における情報収集活動とその社会的背景-武州幡羅郡中奈良村野中家の事例」(『地方史研究』第 46 巻第 4 号、1996 年)、宮澤道代「武蔵国における豪農の蔵書と心学講和」(『埼玉地方史』第 54 号、2005 年)、工藤航平「近世地域社会における蔵書とはなにか一地域〈知〉の史料論的研究を目指して一」(『国文学研究資料館紀要 アーカイブズ研究篇』第 7 号、2011 年)、工藤航平『近世蔵書文化論 地域〈知〉の形成と社会』勉誠出版、2017 年、ほか。
- (17) 鈴木俊幸『江戸の読書熱 自学する読者と書籍流通』平凡社、2007 年、第三章参照。
- (18) 埼玉県立文書館収蔵文書目録第 22 集『林家文書目録』埼玉県立文書館、1986 年、解説参照。

**展示写真**



**展示入口バナー**



**挨拶パネルと配布資料**



**はじめに 展示資料**



**第1章 展示資料**



**第2章 展示資料**



**第3章 展示資料**



**おわりに 展示資料**

埼玉県立文書館 令和6年度企画展

# 本をめぐる文化—江戸時代の本屋と読者たち—

## 展示資料一覧

会期：令和7年2月 1日(土)～4月27日(日)  
 前期：2月 1日(土)～3月16日(日)  
 後期：3月18日(火)～4月27日(日)

- ※会期中に一部展示替えを行います。また、展示資料は事情により変更になる場合があります。
- ※資料名は原則として当館の収蔵文書目録・検索システム掲載の名称を使用していますが、一部変更したものが 있습니다。
- ※各項目の [ ] は推定事項を表します。
- ※本紙の掲載順は会場での展示順と必ずしも一致しません。

はじめに 本を読む人々				
番号	年代等	資料名	文書番号	備考
1	[文久2年(1862)4月]	麻疹養生伝 (はしか絵)	小室家文書6369-3	前期展示
2	嘉永6年(1853)睦月	難波職人歌合 下巻	井上家文書2982	
3	天保14年(1843)	北斎画苑初編 全	野中家文書8249	
4	[近世]	溪斎浮世画譜	野中家文書8250	

第1章 花開く江戸の出版文化				
番号	年代等	資料名	文書番号	備考
5	慶長11年(1606)	孫子	井上家文書3407	
6	万治元年(1658)	無門関	小室家文書2256	
7	享保13年(1728)正月	北条時頼開分二女桜	小室家文書2475	
8	元禄3年(1690)正月	うたのよみかた	西角井家文書9318	
9	寛延2年(1749)	南嶺子 卷之四	若林家文書135	
10	元禄11年(1698)2月	ある人のたづね 下	奥貫家文書3203	
11	弘化2年(1845)	触書拾三 米穀等之部・舛秤等之部・請職人等之部・唐物并唐船等之部・葉種之部・書籍并板行等之部 中川飛驒守出之	稲生家文書1624	
12	弘化2年(1845)	丙午明辨	川島家文書1291	
13	[近世]	覚(孟子古義古本四冊外本代金受取)	小室家文書1291	
14	[近世]	女庭訓往来倭文鑑	奥貫家文書3271	
15	[天保5年(1834)]	江戸繁昌記 三篇	小林(正)家文書1966	

展示資料一覧 表

第2章 江戸の本屋の手がけた作品				
番号	年代等	資料名	文書番号	備考
16	天明元年(1781)5月	小野篁歌字盡	稲生家文書1730	
17	文化14年(1817)	吉原細見五葉松	小室家文書3392	
18	宝永5年(1708)	自遣往來	新井(优)家文書23879	
19	宝暦2年(1752)長月	当流小謡	町田家文書93	
20	天保3年(1832)	にせ紫いなか源氏二編 下冊	橋本明氏収集文書3273	
21	文政13年(1830)6月	増補曆略註	斎藤(英)家文書733	
22	天明5年(1785)	百籤鈔	川田氏収集文書2723	
23	嘉永5年(1852)	仮名反古一休草紙 二編下	町田家文書248	
24	嘉永6年(1853)	[武鑑]	鬼久保家文書2436	
25	寛政元年(1789)11月	万国新話 卷之四	黒田(小)家文書3819	
26	[文政7年(1824)4月]	武蔵名所考 卷一	井上家文書3777	
27	[万延元年(1860)10月]	金近着緒締善玉	足立家文書1030	前期展示
28	[慶応元年(1865)7月]	善悪思案内	足立家文書1047	後期展示

第3章 近世埼玉県域の人々と本				
番号	年代等	資料名	文書番号	備考
29	天保8年(1837)正月	万書籍出入留	野中家文書1925	
30	[近世]	覚(大橋庭訓式冊外書物三冊代金請取)	坂本家文書1519	
31	[近世]	經典余師 孟子一 六	古沢家文書230	
32	[近世]	西遊雜記 卷之拾(写)	野中家文書8266	
33	文政4年(1821)9月	歌道用諸覚書卷之一(付蔵書目録)	林家文書2419	
34	[近世]	[書物拾五郎御送り候外年[家]板、跡本等二付書状]	坂本家文書2421	
35	[明治時代]	[紫式部日記書抜]	井上家文書202	
36	[文政4年(1821)]	紫式部日記傍註 上	井上家文書2862	
37	文政4年(1821)	紫式部日記傍註 下	井上家文書2863	
38	[近世]	源氏物語(きりつぼ)(写)	奥貫家文書2969	
39	[近世]	源氏物語(はつね)(写)	奥貫家文書2979	

おわりに 近代埼玉県域の本屋				
番号	年代等	資料名	文書番号	備考
40	紀元2533年 [明治6年(1873)]	童蒙習字本	野口(泰)氏収集文書37	
41	明治5年(1872)6月	学問のすすめ	小林(正)家文書2927	
42	明治9年(1876)1月	郵信短猪用文	小林(正)家文書2094	
43	大正4年(1915)1月25日	尋常小学理科筆記帳	飯塚家文書5692	

